

ジョンソンと献辞

——十八世紀文筆業の一側面——

青 木 健

(1) 献辞の歴史的意味

十八世紀イギリスの文筆業の変遷を辿る際に避けて通れぬ問題に、作家とパトロンの関係がある。『文学評論』の中で漱石も「十八世紀の一般状況」の一項目に「文学者の地位」を設け、アン女王期とジョージ世期におけるパトロン制の差異について言及し、前者を「国家保護」の時代、後者を「個人保護」の時代と呼んでいる。しかし、かならずしもそんなに明確に区別できるとは限らない。本来的にパトロン制は「個人的」なものであって、漱石が言う「国家保護」と言う表現は少々曖昧である。かならずしも国家が合法的に文学者を保護したわけではないからである。いずれにせよ、パトロン制は十八世紀においては、流動的であり、世紀が進むにつれ変貌していったというのが実体である。その変容は発展的でなく、衰退に向かう傾向にあった。そしてついにはその社会的、文化的意味が失われて行く。十八世紀の文筆業の世界が近代化へ向かうこととパトロン制の衰退とはパラレルの関係にあったことがわかる。ところで、本来的な意味は別として、パトロン制には経済的支援が付随するというのが常識であった。したがって、その衰退はこの前提が崩れ、それに取って代わるものの存在の顕在化と軌を一にする。それは読者層の増大と拡大された販路の定着という経済的要因を基盤とした、作家——出版者（書籍業）——読者の間の近代的な形態の確立という形をとって立ち現われる。十八世紀文筆業の世界はその意味でいわば新旧の制度が混在し、複雑にからみ合った過渡期であったといえる。

パトロン制衰退を天下に示した出来事がチェスタフィールド卿に宛てたジョンソンの手紙であると、一般に文学史でも扱われるが、実情はそんなに簡単に紋切り型に事が進んだとは思われない。さまざまな紆余曲折があり、多くの要因が複雑にからまった末に、新旧の制度が逆転し、

文筆業の世界も近代化へ向かったのであろう。多岐にわたり、錯綜したそれらの要因を解きほぐして、このパトロン制の実情を少しでも明らかにする手段の一つに、作家による「献辞」(dedication)の慣行に光を当てるとする方法がある。しかし、「献辞の慣行は文筆業そのものの営為と同じくらい古くから存在していた」¹⁾と言われるように、その全体像を明らかにするのは非常に困難である。ただ、十八世紀において、「献辞」の慣行が大きく揺さぶられ、不安定になって行く姿を暗示し、同時に文筆業がおかれた状況の複雑さを反映するいくつかの事例を見ることはできる。

本論では、文筆業の新旧の狭間にあつて苦闘したジョンソンの手になる献辞の例を主として検証するが、その前に十八世紀における献辞の意味を歴史的にみて、その変容の実体を検証してみたい。

H. B. ホイートリーは『パトロンと友人への書物の献呈——文学史の一断面』(1887年)において、献辞の歴史を辿りつつ、献辞の意味の推移を次のように三段階に分けている。

- 一、献辞が友人やパトロンに対して、献呈者の友情と尊敬の念を自然な形で表明した時代。
- 二、献呈者の心からあらゆる屈辱感が失われ、阿諛と追従の言葉を最も高額で買い取る者に売り飛ばした時代。
- 三、パトロン制が消滅した時、作品と友人との結びつきを求める目的でのみ献辞が利用された時代²⁾。

上記の分類の中で、三についてはある程度時代を特定するのは可能であろう。「パトロン制が消滅した」十九世紀には、第三の記述に合致する献辞をみることができるからである。例えば、ジョン・フォースターがその『ゴールドスミス伝』(1848年)を友人のチャールズ・ディケンズに献呈した際の献辞はその一例と言えよう。しかし、一及び二の記述について、その時代を特定するのは困難である。それらの内容が過不足なくあてはまる一定の時代(ホイートリーは一を十七世紀に、二を十八世紀にあてはめようとしているが)を特定しようとしても無理である。それらの意味内容を備えた献辞を十七世紀にも、十八世紀にも見いだすことはたやすいからである。とりわけ、十八世紀にはこの分類に収まりきれない事

例が数多くある。さらに十八世紀といっても、初頭、中葉、後期それぞれの時代相に従って、献辞の意味のとらえ方は異なっている。興味深いのは、変質する献辞の意味が、文筆業がおかれた状況の複雑さを反映しているという事実である。

ところで、ジョンソンのパトロン制及び献辞に対する姿勢はそのような時代の流れを背景においた時、どのようなものだったのだろうか。一言でいえば、それはアンビバレントな、時として矛盾とさえ思えるものである。チェスタフィールド卿との一件以来、ジョンソンは公にはパトロン制反対の姿勢を貫いているが、現実には多くの献辞を書いているからである。さらに、1762年にジョージ三世より年金を下賜された際には、最大級の感謝の意を表わしている。その一方で、『英語辞典』では、パトロン及び年金について破天荒な定義を与えている。しかし、十八世紀の作家の生き方をみると、それはかならずしもジョンソンだけでないことが分かる。たとえば、詩人エドワード・ヤングは1720年代にすでに「献辞」の意味を作品の中で言及している。『功名心』(*The Universal Passion*, 1725-28)の中で、文筆業を自嘲ぎみに説明しながら、献辞について次のように述べている。

All other trades demand, verse-makers beg;
A dedication is a wooden leg, (iv, 191—2)³⁾

他のあらゆる職業は要求するが、詩のつくり手は乞い求める、
献辞は木の義足、(四節一九一—二)

「木の義足」('wooden leg')とは、物乞いが偽装して同情を引くための常套手段だという意味であろうか。ここには、「卑屈と追従とは献辞の形式上の規則」⁴⁾という定義以上に屈辱感がにじみ出ている。さらに、献辞の慣習を愚行と見なしながら、パトロンに対する阿諛追従はグラブ・ストリートの文士にとって、欠くことのできないものという作者のアンビバレントな意識を読み取ることができる。

パトロン制を忌み嫌いながら、パトロン制とは無縁な孤高の詩人の位置を維持できないジレンマ。ヤングの作家(詩人)としての経歴をみる時、そのジレンマは痛切である。「彼は名声をかくとくするための手段

はことごとく講じた。富裕なひとびとや地位のあるひとびとにこれ以上ない阿諛追従を並べ立てた」⁵⁾とコリンズはヤングの際だったパトロン狩りについて語っている。

コリンズの指摘は少々性急に過ぎるきらいがあり、偏った印象をいなめないが、他方、「献辞」の解釈にみられるように、ヤングは作家に追従と卑屈を強いるパトロン制に怒りを覚えつつ、隷属を余儀なくされる自己の立場に忸怩たる思いがあったろうことは容易に推察できる。「彼は阿諛追従に満ちた詩の中に追従者たちを厳しく弾劾する言葉を挿入して自己の良心を慰めていた」⁶⁾というコリンズの評言は興味深い。

ヤングほどではないが、パトロン制において現実と理想の狭間で矛盾した態度をとった作家を十八世紀前半においてすら見いだすことはそうむずかしいことではない。彼等は理念的には献辞にまつわるスキャンダラスな側面——隷属と無節操——を意識しつつもパトロンと手を切ることができなかったというのが実情であったと思われる⁷⁾。

献辞及びパトロン制に対して矛盾した姿勢を見せる作家がいる一方で、献辞の本来的な意味——献辞が友人やパトロンに対する作家の友情と尊敬を自然な形で表明する——に則ってそれらを実践できた幸運な作家たちを十八世紀、とりわけ、その初頭に見いだすことができる。『タトラー』(177号)で、ステイールは例のように「偽りの献辞」と比較しながら、「真の献辞」について次のように述べている。

In ancient time it was the custom [for authors] to address their works to some eminent for their merit to mankind, or particular patronage of the writers themselves, or for knowledge in the matter of which they treated. Under these regards it was a memorable honour to both parties, and a very agreeable record of their commerce with each other.⁸⁾

古代においては、人類に貢献した優れた人々、作者自身の特定の庇護者、作品の内容に通じている人々に作者はその作品を献じるのが習わしだった。このような関係のもとでは、献辞は両方にとり特別な名誉となり、相互の親密な交流を促進するものであった。

範を古典作家に求め、その比較の上で現代の弱点を指摘するというオーガスタン期特有のパターンがここでも見いだせるが、アディソン、ステイールは単にエッセイで献辞の意味を解説するにとどめず、それを実践にうつして興味深い例を提供している。彼等は合本版『タトラー』及び『スペクテーター』を当時文学庇護者として著名だった貴族その他に献辞を添えて献呈している。因に『タトラー』第三巻は時の大法官ウィリアム・クーパーに、第四巻はハリファックス伯チャールズ・モンタギューにそれぞれ献呈されている。同じく『スペクテーター』第一巻はイーブシャム男爵ジョン・ソマーズに、第二巻は再びハリファックス、以下、第三巻ヘンリー・ボイル、第四巻マールバラ公、第五巻ウォートン伯、第六巻サザランド伯、第七巻メスエン、最終の第八巻は興味深いことに「スペクテーター・クラブ」のメンバーの一人ウィリアム・ハニコームに捧げられている。

次にその一部をみてみよう。ジョン・ソマーズへの献辞（『スペクテーター』第一巻）には次のような一節がある。

None but a person of a finished character can be the proper patron of a work, which endeavours to cultivate and polish human life, by promoting virtue and knowledge, and by recommending whatsoever may be either useful or ornamental to society.⁹⁾

美德と知識を広め、社会にとり有益で、社会の飾りともなることがらをすすめることにより、人間生活を陶冶し磨くことをめざす作品の庇護者として完璧な人格の持ち主ほど適格者が他にいるでしょうか。

また、ハリファックス伯に捧げられた第三巻の献辞には次のような一節が挟まれている。

I have an ambition this work may be placed in the library of so good a judge of what is valuable, in that library where the choice is such that it will not be a disparagement to be the meanest author in it.¹⁰⁾

本書が価値あるものを見定め優れた識別力の持ち主の蔵書の一つとなり、且つその中であって他の蔵書を汚すことのないようこいねがうものです。

いずれの例でも、阿諛追従という献辞特有の臭味を抜け切っているとは言いが、金銭的援助を求めようとする卑屈な態度は感じられない。むしろ、優れた作品をそれに相応しい人物に献じようという、献呈者の自信をくみとることができる。「献辞は両方にとり特別な名誉となり、相互の親密な交流を促進するものであった」というスティールの「真の献辞」論を裏書きしている。

庇護者と作家の文学作品を通してのこのような幸福な関係を生むためには、当然のことながら両者（とりわけ後者）における経済的、社会的安定を基盤とした親密な交流が前提となろう。事実、アディスンとハリファックス伯の関係は、前者がオックスフォード大学在学中にすでに始まっている。グランド・ツァーを援助し、帰国後はソマーズを介して300ポンドの年金を支給し、さらには政界へと導き入れ国務大臣になるまでハリファックスはアディスンを庇護している。たとえその動機が政治生活と密接な関係があったとはいえ、ハリファックスの肩入れは異常なほどである。一方、『タトラー』、『スペクテーター』の成功は文人としての名声をアディスンにもたらした。こうして彼はある意味で庇護者の期待に応えたとともに文学者として、社会人として自信を深めたであろう。したがって、この時点でアディスンは何ら引け目を感じることなく、上記のような献辞を書くことができたと思われる。

(2) 献辞にまつわる醜聞

『スペクテーター』合本の献辞にみられるように、無心や金銭的援助の意図を感じさせない献辞のありようは、献呈者の経済的社会的のみならず、精神的自立を強く印象づける。しかし、パトロンと作家のそのような理想的ともみえる関係はアン女王時代をピークに長く続かず、コリンズによれば、1730年代にはそれは衰退の傾向にあったという¹¹⁾。とりわけ、1714年に始まるハノーバー王朝の出現によって政治的環境はがらりと変わり、さまざまな面で前王朝との違いが明白になっていったこと

は一致した意見である。政治家と密接なつながりをもっていたパトロン制も例外ではなかった。

文士庇護を実質的なものならしめるのは言うまでもなく経済的援助であるが、献辞はそのつなぎの役目を担っていた。この慣習は献辞に対する報奨として経済的に支援すること——一般的には作品の出版費用にみあう金銭的援助をすること——から成り立っており、基本的には個人的な関係に基づくものであった。しかし、1730年代に入ると、そのような個人的関係とは無縁な形で献呈を認めさせようと無節操に貴族の門をたたき群小文士の数が増えたと言われる。ホガースの『悩める詩人』(1736年)に象徴されるグラップ・ストリートの住人にとって、それは死活をかけた行為であったろうが、同時に理想的なパトロン制の衰退を促す直接の原因の一つであったと思われる。とはいえ、「当時の作家が著作の出版にこぎつけるためには、50編もの献辞を用意しなければならなかった」¹²⁾とすれば、彼等が著作物を献じる相手を個人的に知る必要を感じておらず、献辞を最も高く買い取る人物であれば誰でもよかったとしてもあながち非難はできないだろう。

たしかに、三文文士を一方的に非難するのは不公平というものである。パトロン制衰退の間接的原因をパトロン自身の姿勢にも求めることができるからである。自称パトロンの中には、「自ら追従に満ちた献辞を勝手に書き、それに署名して僅かな額を与える」¹³⁾という不謹慎な貴族もいたという。こうなると、献辞の本来的な意味は失われ、スキャンダラスな面が顕在化してくるのは必然であった。そのような変化をフィールディングは『一七三六年の歴史的記録』(*The Historical Register for the Year 1736*)の序文で仄めかしている。この笑劇には最初に「献辞への序文」('Preface to Dedication')がついており、そこでは、次のように献辞の理念が皮肉られている。

As no man hath a more stern and inflexible hatred to flattery than myself, it hath been usual with me to send most of my performances into the world without the ornament of those epistolary prefaces commonly called Dedications; a custom, however, highly censured by my bookseller, who affirms it a most unchristian practice....¹⁴⁾

私ほど阿諛追従に対して頑固に嫌悪を抱いている者もないところから、作品を世に出す時は一般に献辞と呼ばれているあの書簡体による序文を付けない事にしています。[献辞とは] 私の書店に言わせるととても非人間的な慣習と言うことになります……

さらに、「一般大衆への献辞」('Dedication to the Public')と称する献辞も設けられており、そこには次のような一節が見いだせる。

Asking leave to dedicate, therefore, is asking whether you will pay for your Dedication, and in that sense I believe it understood by both authors and patrons.¹⁵⁾

献呈を認めてもらうことは、とりもなおさず相手に献呈の報奨として金銭的施しを承諾させることであり、その意味では作家とパトロンとの間で暗黙の合意がなされていると思う。

そして、フィールディングは風刺劇『落首』(*Pasquin*, 1736)においても、ふたりの登場人物に献辞について語らせている。

Fustian: 'A dedication is generally a bill drawn for value therein contained; which value is a set of nauseous fulsome compliments which my soul abhors....'

Sneerwell: 'Yes, faith, a dedication without flattery will be worth the seeing.'¹⁶⁾

ファスティアン 「献辞というのは一般に振り出された手形みたいなものさ。むかつくような阿諛追従が並べたてられている……」

スニアウエル 「その通り、追従のない献辞にお目にかかりたいもんさ」

『落首』の副題に「時代への風刺劇」('A Dramatic Satire on the Times')とあるように、当時(1730年代)献辞がどのように大衆の目から見られるようになっていたかが、笑劇ということを割り引いてもある程度伝わっ

てくる。また、フィールディングが『一七三六年の歴史的記録』を「一般大衆へ」献呈した行為は、作品それ自体の風刺的性格もあろうが、パトロン制の微妙な変化に気づいた作家が敏感にそれに反応したことのあらわれとみることができるだろう。

十八世紀も中葉に近づくとつれ、パトロン制に反発するかのようになり、献呈の対象は多彩になってくる。1753年、劇作家フットは喜劇『パリのイギリス人』(*An Englishman in Paris*)の脚本を出版者ヴァイアンに献じている。「正確な印刷と良質の紙」を使って作品の出版に貢献したことに対する感謝の念からであった。ゴルドスミスは、1764年長詩『旅人』(*The Traveller*)を兄ヘンリーに献じて、パトロンへの隷属を風刺している。1753年、ウィリアム・ホガースは『美の曲線』(*The Analysis of Beauty*)の補遺('supplement')として『芸術の歴史』(*A History of Arts*)を考えていたが、それに次のような献辞を用意していた。

The Non-Dedication

Not dedicated to any prince in Christendom, for fear it might be thought an idle piece of arrogance; not dedicated to any man of quality, for fear it might be thought too assuming; not dedicated to any learned body of men, as either of the Universities or the Royal Society, for fear it might be thought an uncommon piece of vanity; nor dedicated to any one particular friend, for fear of offending another; therefore dedicated to nobody; but if for once we may suppose nobody to be everybody, as everybody is often said to be nobody, then this work is dedicated to everyone.

By their most humble and

devoted

WILLIAM HOGARTH.¹⁷⁾

献辞にあらざる献辞

キリスト教国のいかなる王侯貴族に献じるものではない、傲慢不遜

な作品とみなされてはならないから。どんな優れた人物にも献じるものではない、僭越なものとおもわれてはならないから。大学や王立協会のような学問の府に献じるものでもない、虚栄心に満ちた作品ととられたくないから。特定の人に献じるものでもない、その他の人の機嫌を損じたくないから。だから誰にも献じられない。しかし、すべての人がしばしば誰でもないといわれているから、もし、誰でもないというのがすべての人というなら、本書はすべての人に献じられることになる。

すべての人の忠実なる僕、
ウィリアム・ホガース。

人を食ったようなこの献辞では、一般的な献呈の対象が否定されており、献辞の慣行を皮肉っているのが分かる。これが書かれたのはやはり1753年であるのをみると十八世紀中葉ともなると、特異な献呈形式をとり献辞の慣行を風刺して、パトロン制そのものを間接的に批判する作家が現れたことがわかる。ホイートリーは「時が経るにつれて、買収される献辞という悪には自浄作用が働くようになった」¹⁸⁾と述べているが、それもこの慣行が大衆の目からはひどく墮落したものに映るようになったからだと思われる。つまり、それだけ大衆（ということは、一般読者のことだが）が重要な存在になったことの証左であろう。ジョンソンが1756年にパトロンを「一般に横柄な振る舞いで文士を庇護し、その見返りに阿諛追従を受ける卑しき者」と定義した時、個人的にはチェスタフィールドとの一件も影響しているのであろうが、社会風潮はすでにパトロン制否定の方向に進んでいたという歴史的事実を忘れるべきではないだろう。当時ジョンソンは『紳士雑誌』のケイヴを始め、トンソン、ドッズリーなどのロンドン書籍商組合に所属する有力出版者と肝胆相照らす仲間となっていた、否、むしろ、出版者が彼を必要とするようになっていたのである。文学者の地位は、アン女王時代におけるパトロン制に庇護された状況とは異なった形で、中葉以降上昇しつつあったことが献辞に対する作家たちの姿勢の中に取り取ることができるが、それを背後から支えたのは読者層の増大であったと思われる。

(3) 献辞に対するジョンソンの姿勢

われわれは既に献辞に対するジョンソンの姿勢はアンビバレントだと指摘したが、さらに具体的にその点を検証してみよう。ホイートリーは献辞に関してジョンソンは「他の人々にとって威厳をもった代弁者だが、自らのために卑屈になって [パトロンの援助を] 乞い求めることはなかった」¹⁹⁾と述べているが、正確に言えばジョンソンも「自らのために」献辞とみなされるべきものを書いている。「趣意書」(‘The Plan [of A Dictionary of The English Language]’) と称する書簡体のパンフレットを1747年に書き、チェスタフィールド卿に献呈しているのである。いわゆる、『英語辞典』出版にからむジョンソン—チェスタフィールド事件の端緒となったものである。

この「趣意書」(あるいは「計画書」)を献辞とみるか、単なるパンフレットとみるかは意見の分かれるところだが、内容はともかくとして、その形式は献辞のそれを踏襲している。「趣意書」は以下次のように始まっている。

To the Right Honourable

PHILIP DORMER,

Earl of CHESTERFIELD;

One of His Majesty's Principal Secretaries of State.

My Lord,

When first I undertook to write an English Dictionary, I had no expectation of any higher patronage than that of the proprietors of the copy, nor prospect of any other advantage than the price of my labour....²⁰⁾

陛下の国務大臣、チェスタフィールド伯爵、フィリップ

ドーマ閣下に捧げる。

閣下、

わたしが英語辞典執筆の企画を最初に心に抱いた時、わたしは辞典所有者が求める庇護以上のものを期待しておりませんでしたし、労働の代価以外の報酬を望んでおりませんでした……。

以下、チェスタフィールドへの呼びかけ（「閣下」）や、献呈者特有の卑下した表現を挟みながら、辞典編纂の難しさ、取り入れる言葉の選択、その配列の仕方、綴りや発音の問題、派生語、語源、類縁語、屈折語、さらには動詞の扱い方、シンタクス、慣用的表現、意味と解釈、著名作家による意味のとらえ方の問題、一般語と詩語の差異、等々、およそ言葉に関して考えられる問題を網羅し、最後に辞典編纂の意義に言及することで締め括られている。

このように主として辞典編纂上の問題点を指摘することに多くの言葉が費やされ、内容的に一般的な献辞のそれと趣を異にしているが、他方、チェスタフィールドを「わが国の言語のオーソリティであることは江湖に知れわたっている閣下」（‘...my Lord...whose authority in our language is so generally acknowledged’）という風なパトロンへの阿諛追従ともいうべき一節も見いだせる。そして「閣下の最も忠実なる僕、サム・ジョンソン」（‘Your Lordship's Most Obedient and Most Humble Servant, SAM. JOHNSON.’）と締め括られ、書簡体による献辞の形式を踏襲している。

一方、ジョンソン自身は、この「趣意書」に関してボズウェルとのやりとりの中で、次のように語ったという。少々長いが『ジョンソン伝』から引用してみよう。

「趣意書」は当時の陛下の国務大臣の一人であったチェスタフィールド伯爵フィリップ・ドーマに宛てられた。文壇で名を挙げたいという極めて強い野望の持主であったこの貴族は、この企画を耳にするや早々にもその成功を願う極めて力強い支持を表明していた。恐らく多少とも重大な出来事には、間違いのない權威を以て知らされ

れば知って面白く思う曰くつきの裏話が必ずあるものである。ジョンソンは私に語った、「君、僕の『英語辞典』の趣意書がチェスタフィールド卿に献げられるに至った経緯はこうだ、僕は約束の期限までにそれを書き上げるのを怠っていたところ、ドッズリーがそれをチェスタフィールドに献げてほしいという意向をもらした。もっとよいものを書く時間的余裕を得る口実に、僕はこのドッズリーの意向を受け入れた。僕は友人のバサースト博士に言った、『チェスタフィールド卿への呼びかけから万一にも何かよい結果が生まれれば、それは深い魂胆から実現したと思われるかも知れない。しかし実際それは怠慢の一時逃れの口実に過ぎなかった』²¹⁾。

ボズウェルが伝えるジョンソンの「趣意書」執筆の動機は少々曖昧である。たとえば、「万一にも何かよい結果が生まれれば、それは深い魂胆から実現したと思われるかもしれない」という評言は、結果として援助を受けなかった（受けられなかった？）事実を知った時点から振り返った表現となっており、その当時の意志を正直に告白したものである。その援助は、著名人の保証によって著作の信用を得るという単に精神的なものだったかもしれない。しかし、「趣意書」を書き、それを有力貴族に献じたという事実は金銭的援助を意図した献辞に他ならないと判断されても仕方のない行為と思われる。

いずれにせよ、その結果はチェスタフィールド個人のみならず、パトロン一般に対する不信をジョンソンの心に刻んだことは周知のことである。「パトロン」の定義については既に述べた通りだが、さらにジョンソンはユウェナリス模倣の詩の改訂にあたり、学者を悩ます害悪の一つとしての「屋根裏部屋」を「パトロン」と差し替えて、パトロン制への不信を一段と強くあらわにしている。そのジョンソンがパトロン制と深いかわりをもつ献辞を他の人々のためとはいえ書いたという事実はどう解釈すればよいのであろうか。われわれはそれを「ジョンソンのアンビバレントな姿勢」と見なしたが、一方、ボズウェルは次のように言及している。

献辞という風雅な書式に関してはジョンソン博士の右に出る者はない。彼の精神の高邁さは彼自身の名で献辞を書く妨げになった

けれども、他人のための献辞は沢山書いた²²⁾。

ボズウェルの記述には献辞に対する複雑な感慨が込められているように思える。「献辞という風雅な書式」という一方で、「彼の精神の高邁さは彼自身の名で献辞を書く妨げになった」と述べており、献辞への両価的解釈を許している。「献辞とは風雅な書式」であるとしてそのプラス面を肯定し、またジョンソンの卓越した表現力を称える一方で、献辞を書く行為は精神の（少なくともジョンソンの精神にとっては）墮落を意味するとボズウェルは示唆しているからである。ここには、献辞の本来の意味の属性としての「風雅さ」の半面、献辞にまつわる道徳的腐敗の匂いを払拭できないジョンソンの、そしてボズウェルの姿が浮き彫りにされている。

さらにボズウェルは、献辞に対するジョンソンの態度を次のようにも述べている。「他人のために献辞を書くことが自身の感慨を述べることだとは彼は決して考えなかった²³⁾。ということは、彼はあくまで客観的に、あるいは献呈者になりきってその人物のために献辞を書いたということであろうか。前述の「風雅な書式」と考え合わせると、献辞を書く際のジョンソンの姿勢が浮かび上がってくる。優雅で意匠を凝らした文体、そして庇護者に対する感謝の念、尊敬の念が表出され、さらにはパトロン制が名誉ある慣習であることを相手に自然な形で納得させる文体。ジョンソンにとってそれは文学的営為そのものであったであろう。

ボズウェルによれば「彼 [ジョンソン] は著作物の主題が無邪気な [害を及ぼさない] ものであれば、献辞を寄せる書物の主題の種類を問わなかった²⁴⁾」という。ということは、様々な主題をもった著作物を縦横に料理し、それらに合わせて献辞を書いたことを意味する。事実、怪しげな献辞の横行によってこの慣行が疎んじられる風潮の中で、本来の名誉ある文士庇護の伝統にきずをつけない内容と表現をもつ献辞を書くには非凡な文学的力量を必要としよう。さらに、献辞の善し悪しに書物自体の成功・不成功がかかっていたという実質的な意味があり、依頼者に対しても責任を負うとなれば、献辞のもつ重要性は無視できないものであったはずである。

また、ボズウェルの伝えるところによれば「僕は一通り王室の全部の人への献辞を書いたはずだ²⁵⁾」とジョンソンは語ったという。となれば、

献辞を書くにあたり細心の注意と緊張、そして最高の表現能力を要求されたと思われる。しかし、ジョンソンはある意味で危険を伴うそれらの要請に怯むどころかむしろ嬉々として応えようとした印象がある。それでは、どのような献辞を誰のためにジョンソンは代筆したのであろうか。次に様々な実例を書かれた事情にも触れながら検証してみよう。

(4) ジョンソンの献辞

ボズウェルは『ジョンソン伝』の資料を求めて、ジョンソンの手になる献辞の収集に努めたことに関して次のように述べている。「可能な限り綿密な探索にもかかわらず、私は自分が見落としたものが多少あると思っている」²⁶⁾とその不十分なことを告白している。事実、ジョンソンは「他人のための献辞を非常に沢山書いた」という割には、ボズウェルが言及した献辞の数は不思議に少ないという印象が強い。その理由については後に検討するとして、さしあたり、ジョンソンが代筆した献辞と判明しているものを次にリスト・アップしてみる。

献呈年度	献呈者	著作物	被献呈者
1743年	ロバート・ジェイムズ 医師(1776年没)	『薬学辞典』	リチャード・ミード博士 医師
1752年	シャーロット・レノックス 女流作家(1804年没)	『女流ドン・キホーテ』	ミドルセックス伯爵
1753年	シャーロット・レノックス	『シェイクスピア例解』	オレリー伯爵
1755年	アントニオ・パレツティ イタリア人批評家 (1789年没)	『イタリア語入門』	?
1756年	シャーロット・レノックス	『シュリの回想録』 (翻訳)	?
1756年	ウィリアム・ベーン 雑文家(1773没)	『チェッカー戯入門』	ロッチフォード伯爵

※1757年	シャーロット・レ ノックス	『恋を弄ぶ』	?
※1758年	ジョン・エンジェ ル 速記者(1764没)	『速記術』	リッチモンド公爵
1760年	アントニオ・バレ ッティ	『伊英辞典』	アフlew侯爵
※1760年	シャーロット・レ ノックス	『ギリシャの劇場』 (翻訳)	?
※1761年	シャーロット・レ ノックス	『ヘンリエッタ』	?
1762年	ジョン・ケネディ 尊師(1782年没)	『年代記の体系』	ジョージ三世
1763年	ジョン・フル 翻訳家(1803年没)	『タッソー集』(翻 訳)	ジョージ三世王妃
1763年	ジェイムズ・ベネ ット尊師(?)	『ロジャー・アス カム著作集』	シャフツベリー伯 爵
※1766年	ジョン・グウィン 建築家(1786年没)	『ロンドン……の 整備』	ジョージ三世
1767年	ジョージ・アダ ムズ 機器製作者(1773 年没)	『天体論』	ジョージ三世
※1767年	ウィリアム・ペー ン	『幾何学入門』	ヨーク公爵
※1772年	ウィリアム・ペー ン	『三角法』	?
※1776年	チャールズ・バー ニー 音楽家(1814年没)	『音楽史』	ジョージ三世王妃
1777年	ザカリ・ピアス尊 師(1774年没)	『ピアス遺文集』	ジョージ三世
※1778年	ジョシュア・レノ ルズ 肖像画家(1792年没)	『絵画論』	ジョージ三世

※1779年	ヘンリ・ルーカス 詩人(?)	『詩集』	?
※1784年	チャールズ・バー ニー	『ヘンデル記念の 演奏会』	ジョージ三世王妃

注 ※：ボズウェルの言及がないもの

?：被献呈者および没年が不明のもの

上記の一覧表からいくつかのポイントが指摘できる。一つは、献呈者の職業および著書が多岐にわたっていること。二つ目はボズウェルが『ジョンソン伝』で言及する献辞の数が予想外に少ないこと（約半数）である。三つ目は1762年以降ジョージ三世及び王妃に対する献辞が急に多くなるという点。これら三つの点からどのようなことが言えるだろうか。第一の点から予想されるのは、当然ながら献辞の内容の多様性である。多彩な主題にしたがって変化する表現形式はどのようなものであろうか。

第二の問題は少々複雑である。伝記的資料と伝記作者の姿勢との関係に深く関わるからである。前述したように、ジョンソンが他の作家や学者のために代筆した献辞の数をボズウェルも正確に確認できなかったと言っている。確かに、収集魔ボズウェルにしては数が少ないと思われる。理由は何なのであろうか。「彼 [ジョンソン] に献辞を代筆してもらった人々の中には多分それ以上の援助を受けたと邪推されるのを内心恐れる余りその事実が世に知られることを好まない人もいたので」²⁷⁾とボズウェルはその理由の一端を語っている。ジョンソンの側近の著名な人物で、ボズウェルとも親密な仲であった者でさえ（であったから?）、自著の献辞がジョンソンによる代筆である事実を明かさなかった事例があったようである。あるいは、そのいきさつを承知の上でボズウェルはそれらを省略したのかも知れない。被献呈者に失礼になるだけでなく、献呈者の誠実が問われかねない代筆という行為が公になることを伝記作者としてボズウェル自身も配慮した結果と取れないこともない。とりわけ、ジョシュア・レノルズと音楽史家チャールズ・バーニー博士には気を遣った様子がうかがえる。たとえば、バーニー博士の著書と推定されるものの献辞についてボズウェルは「彼 [ジョンソン] は一度ドイツのフル

ートのための音楽作品をヨーク公エドワードに献呈したこともある」²⁸⁾という表現で、バーニーのためにジョンソンが献辞を代筆したことを暗に仄めかせるにとどめているのである。事実、ボズウェルがジョンソンによる代筆として明示した献辞の依頼者の中で1791年（『ジョンソン伝』初版発刊年）の時点での生存者はフルとレノックス夫人のみである。因に、バーニー博士は1814年、レノルズは1792年までそれぞれ生存していた。

献辞のリストから読み取れる第三の点は、1762年のジョンソンに対する年金下賜の問題と関連するのであろうか。この年ジョンソンはジョージ三世から三百ポンドの年金を下賜されているのである。その意味で、ジョンソンの態度は彼のパトロン制及びその実質的手段としての年金、さらには、彼の対王室観を見る上で興味深い。

さて、次にジョンソンによる献辞の実例の検証へと移るが、その前に典拠について一言しておく。資料はボズウェルの『ジョンソン伝』からは期待できず（というのも、ボズウェルは献辞に言及はするが、本文はほとんど提示しないからだ）、もっぱらアーサー・マーフィー編の『ジョンソン全集』（1810年刊）及びすでに触れたホイットリーの著書その他に頼らざるを得なかった²⁹⁾。また、献辞の全文を掲載する余裕もないので、ジョンソンの献辞の特徴と多様性を示す箇所に言及し、それらを指摘してみたい。

1743年に書かれたミード博士への献辞は、ジョンソンと同じリッチフィールド出身の医学博士、ロバート・ジェイムズに代わって書かれたものである。ジョンソンは彼を「自己の職業に彼ほど心を傾注した者はいない」³⁰⁾と評したとボズウェルは伝えている。要するにジェイムズはジョンソンにとり「尊敬する学友」の一人なのだ。ボズウェルが珍しく原注として全文を掲載しているので本論でも英文とその訳を次に掲げる。

To Dr Mead.

Sir,

That the Medical Dictionary is dedicated to you, is to be imputed only to your reputation for superior skill in those sciences which I have endeavoured to explain and facilitate; and you are, therefore, to consider this address, if it be agreeable to you, as one

of the rewards of merit; and if otherwise, as one of the inconveniences of eminence.

However you shall receive it, my design cannot be disappointed; because this publick appeal to your judgment will show that I do not found my hopes of approbation upon the ignorance of my readers, and that I fear his censure least, whose knowledge is most extensive.

I am Sir,

Your most obedient humble Servant,

R. James.³¹⁾

ミード博士に献ず

博士,

この『薬学辞典』を貴下に献呈する所以は、要するに貴下がこの学問分野において博しておられる名人としての声望に他なりません。私は単にこの技術を説明し解説しようと努めただけである故に、もしも貴下がこの献辞を憎からず思し召すならば、それは実力に伴う報酬の一つであると、またご不快に思われるならば、これを高名に伴う煩わしさの一つとお考え頂くようお願い申し上げます。

貴下のお考えがどうであれ、私の意図が果たされずに終わることはありません。事実私がかように貴下の判断に公的に訴えた理由は、私が世間の是認の希望を読者一般の無知に頼って得ようとするのではなく、それ故に世の最も高名な碩学の非難を少しも意に介しないことを証するためであります。

最も忠実なる僕,

R. ジェイムズ。

この書簡体の献辞についてボズウェルは「この極めて優秀な人物 [ミード博士] の恩顧を得るための巧妙な措辞で綴られている」³²⁾と評している。「巧妙な措辞」とはどの表現を指すのか不明だが、一つ言えることは、この献辞が R. ジェイムズ本人以外の手になるものという印象がみじんも感じられない点である。ホイートリーは「学友のためか表現も親

身なもの」³³⁾と述べているが、これは両者の関係を知った上での後知恵的な評言であり、むしろ「[ジョンソンは] 献辞を代筆することが自己の感慨を述べることだとは決して思わなかった」と伝えるボズウェルの言葉の方が真実味がある。献辞特有の阿諛追従や卑屈な態度を露骨に出すことなく相手を満足させること、それには文学的技巧を要するであろう。ジョンソンは「型にはまった献辞はそれ自体すでに追従を表明しているようなものだ」³⁴⁾と語っていたという。

「型にはまらない献辞」を求めるジョンソンの文学的レトリックとはどのようなものか。たとえば、レノックス夫人の『シェイクスピア例解』の献辞に見られる次の一節にはその一端が表れているように思える。

With this view I have very diligently read the works of Shakespeare, and now presume to lay the result of my searches before your lordship, before that judge whom Pliny himself would have wished for his assessor to hear a literary cause.³⁵⁾

このような考えのもとに、私はシェイクスピアの作品を丹念に読みました。そこで今、文学的美質の鑑定者としてプリテウスも選んだであろう閣下の御前に非礼を顧みず、私の研究成果なるものを献呈させていただきます。

ここで呼びかけられている「閣下」は、スウィフト論などで著名な文人貴族のオレリー卿である。彼はジョンソンの『英語辞典』の「趣意書」の草稿を読み表現の卓越性を指摘した人物として知られている。ここでは、オレリー伯爵の批評能力がローマの著述家プリテウスのそれになぞらえられている。パトロンへの阿諛追従というべきものが、一捻りされてユーモアを醸し出している。

ボズウェルはジョンソンの献辞のオリジナリティとして「本体をなす論考と実によく適合している」³⁶⁾点を指摘しているが、ウィリアム・ベーンの『チェッカー戯入門』公刊に際してロッチフォード伯爵へ寄せたジョンソン代筆による献辞はその一例であろう。全体に献辞特有の堅苦しさが消え、コミカルな印象さえ感じさせる。たとえば次の一節。

Triflers may find or make any thing a trifle; but since it is the great characteristic of a wise man to see events in their causes, to obviate consequences, and ascertain contingencies, your lordship will think nothing a trifle by which the mind is inured to caution, foresight, and circumspection.³⁷⁾

物ごとを軽く考える者は万事を取るに足らぬものとするものですが、賢者の偉大な特性は原因の中に帰結を見て、種々の結果を未然に防ぎ、偶然を確固たるものにすることにある以上、貴卿は精神を用心、洞察、深慮へと導くすべての物ごとを決して取るに足らないものとお考えにならぬと存じます。

ここでは、チェッカー戯が単なる暇つぶしの遊戯ではなく、あたかも重大な出来事ででもあるかのように扱われ、誇張のレトリックが効果をあげている。後半の次の箇所でも誇張されたユーモラスな表現が使われている。

The same skill, and often the same degree of skill, is exerted in great and little things, and your lordship may sometimes exercise, on a harmless game, those abilities which have been so happily employed in the service of your country.³⁸⁾

同じ技術、しばしば同じ程度の技術が大小さまざまな事柄に用いられるものです。閣下は、この無邪気な遊戯においても、閣下が国家のために御奉仕なされた能力を行使なされるであります。

「無邪気な遊戯」を行う能力を国家への奉仕のそれに引上げ同等のものとして権威づけるおかしみがにじみ出ている。ボズウェルは上記の献辞についてこう評している。「チェッカーの遊戯は注意を張り詰めさせず集中する上で特別の効果を発揮する。知らず知らず心を穏やかにする落着きと重厚さを伴い……〈中略〉……ある種の心身能力が開発されるのでジョンソンは自己の献辞の主題をこの遊戯の最も明白な取り柄で権威づけようと念じた」³⁹⁾。ジョンソンの献辞に劣らずボズウェルの評言も

ユーモアあふれたものである。

次の例はジョージ三世に献呈されたケネディ尊師の『天文学上の年代記の体系』への献辞であるが、ボズウェルによれば、この著作自体の結びの一節は疑いもなくジョンソンの筆になるものだという。つまり、ジョンソンはこの著作に関して、献辞のみならず、本文にも手を入れたことになる。ジョージ三世に献呈されたいきさつは不明だが、とりわけ「恭譲で優雅な調子」で献辞を書いたであろうことは想像に難くない。献呈の理由もふるっている。

An age of war is not often an age of learning: the tumult and anxiety of military preparations seldom leave attention vacant to the silent progress of study, and the placid conquests of investigation; yet, surely, a vindication of the inspired writers can never be unreasonably offered to the DEFENDER OF THE FAITH, nor can it ever be improper to promote that Religion, without which all other blessings are snares of destruction, without which armies cannot make us safe, nor victories make us happy.⁴⁰⁾

戦争の時代が学問の時代となることは滅多にありません。軍事的な準備のために紛糾と不安が生じ、学問の静かな発達にも、研究の穏やかな成果にも注意の目はまれにしか注がれないでしょう。しかし、靈感を受けた作家たちの支持はかならず時宜を得て『信仰の擁護者』へ与えられるでしょうし、信仰を世にひろめることは決して不適切なことではないでしょう。もし、それがなければあらゆる祝福は破滅への罠へと陥るでしょうし、もしそれが欠けるなら軍隊はわれわれの安全を保障することもなく、勝利がわれわれを幸せにすることもないでしょう。

この当時（1762年）イギリスはフランスと対立しており、前年首相となったピュート卿はスペインに宣戦布告している。時代を反映させながら、学問の擁護者としての王を称えることによって時事性と学問の不変性を結びつけたところにジョンソンの巧みさがみられる。

以上、二、三の例を通してジョンソンの献辞の多様性と独自性を検証

したが、次に典型的な例を吟味することによってジョンソンの献辞の特質をさらに考察してみよう。

ボールター・コーニーは *Notes and Queries* (1850年二月号) に寄せた論文の中で、ウィリアム・ペーン著『幾何学入門』(1756年) に添えられた献辞はジョンソンの代筆と推定し、その「外的証拠」('external evidence') として著者と出版者が前著(『チェッカー戯入門』) と同一である点をあげている。しかし、彼は「内的証拠」('internal evidence') については読者の判断に委ねる」として分析を放棄している。コーニーが「内的証拠」で何を指すか不明だが、さしあたり「表現パターン」ないし「アーギュメント(論の展開)」ととり、それを検証してみよう。

To His Royal Highness the Duke of York.

Sir,

They who are permitted to prefix the names of princes to treatises of science generally enjoy the protection of a patron, without fearing the censure of a judge.

The honour of approaching your royal highness has given me many opportunities of knowing, that the work which I now presume to offer will not partake of the usual security. For as the knowledge which your royal highness has already acquired of Geometry extends beyond the limits of an introduction, I expect not to inform you, I shall be happy if I merit your approbation.

An address to such a patron admits no recommendation of the science. It is superfluous to tell your royal highness that Geometry is the primary and fundamental art of life; that its effects are extended through the principal operations of human skill; that it conducts the soldier in the field, and the seaman in the ocean; that it gives strength to the fortress, and elegance to the palace. To your royal highness all this is already known; Geometry is secure of your regard, and your opinion of its usefulness and value has sufficiently appeared, by the condescension in which you have been pleased to honour one who has so little pretension to the notice of princes, as,

Sir,

Your royal highness,

Most obliged,

Most obedient,

And most humble servant,

WILLIAM PAYNE.⁴¹⁾

ヨーク公爵閣下へ

閣下、

王侯貴族の御名を自己の科学論文に添えることを許された者は、酷評を受ける懸念もなく、庇護者の保護を享受できるものです。閣下の知己を得るという名誉に浴した結果、今あえて閣下のもとに献呈しようとする著作物が尋常ならざる保証を確実にすることを知る多くの機会を私は得ました。というのも、「幾何学」に関する閣下の知識は既に入門の域をはるかに超えていられる以上、閣下の愛顧を受けることが幸せこの上ないことをあえて申す必要はありますまい。

かくなる庇護者に対して科学の重要性を推奨する必要もありますまい。「幾何学」が人生において第一義的で根本的な意味をもつ科学であること、その影響は人間の技術的営為のなかで益々重要性を増すこと、戦場の兵士や海上の船員にとり、その指針となること、「幾何学」が砦をさらに強固にし、宮殿を優雅なものとすることを閣下に語るのは余計なこと。閣下におかれてはこれらのことすべてに通曉されていられるのですから。「幾何学」はかならずや閣下の顧慮を得るでありましょうし、その有益性と価値に関する閣下の見解は、王侯貴族の愛顧を受ける機会をもたなかった者に示された思召しによってあまねく世に知られることでありましょう。

恐惶謹言　頓首再拝

ウィリアム・ペーン。

ヨーク公爵に宛てたこの献辞のアーギュメントを分析すると次のようになろうか。まず、公爵に呼びかけた後、著作物に対するパトロンの影響力について「批評家の酷評を回避できる」と述べ、一般論としてパトロンの権威とその有効性を指摘。次いでその理由としてパトロンの専門的能力を称え、有効性の根拠とする。次に「幾何学」の学問的意義を一般論として主張。最後に作品の価値を保証するパトロンの専門における高い見識を再び絶賛して終える。この論の流れをさらに要約すると次のようになろうか。パトロンの権威とその有効性——パトロンの専門的能力称賛——著作物の一般的意義——パトロンの見識絶賛。

上記の献辞がはたしてジョンソンの手になるものかどうかを次の例との比較によって考察してみよう。これはホイートリーがジョンソンの代筆による献辞のなかで最高のものの一つと絶賛するパーニー博士の『音楽史』（1776年）に寄せたものである。

To the QUEEN.

Madam,——the condescension with which your Majesty has been pleased to permit your name to stand before the following History, may justly reconcile the Author to his favorite study, and convince him, that whatever may be said by the professors of severer wisdom, the hours which he has bestowed upon Music have been neither dishonourably nor unprofitably spent.

The science of musical sounds, though it may have been depreciated, as appealing only to the ear, and affording nothing more than a momentary and fugitive delight, may be with justice considered as the art that unites corporal with intellectual pleasure, by a spieces of enjoyment which gratifies sense, without weakening reason, and which therefore the great may cultivate without debasement, and the good enjoy without deprecation.

Those who have most diligently contemplated the state of man, have found it best with vexations which can neither be repelled by splendor, nor eluded by obscurity; to the necessity of combating these intrusions of discontent, the ministers of pleasure were indebt-

ed for that kind reception, which they have perhaps too indiscriminately obtained. Pleasure and innocence ought never to be separated; yet we seldom find them otherwise than at variance, except when Music brings them together.

To those who know that Music is among your Majesty's recreations, it is not necessary to display its purity or assert its dignity. May it long amuse your leisure, not as a relief from evil but as an augmentation of good; not as a diversion from care, but as a variation of felicity. Such, Madam, is my sincerest wish, in which I can however boast no peculiarity of reverence or zeal; for the virtues of your Majesty are universally confessed; and however the inhabitants of the British empire may differ in their opinions upon other questions, they all behold your excellencies with the same eye, and celebrated them with the same voice; and to that name which one nation is echoing to another, nothing can be added by the respectful admiration and humble gratitude of, Madam,

Your Majesty's

Most obedient

And most devoted servant,

CHARLES BURNEY.⁴²⁾

女王陛下へ捧ぐ

女王陛下、——かしこくも女王陛下の御名をこれなる「音楽の歴史」に付すことをお許しいただけるならば、著者は自己の得意とする研究に心ゆくまで専心できますし、また、たとえ厳しい批評家からどのような批判を受けたとしても、音楽の研究に費やした時間がそれに値せず、有益でもなかったとは決して思わないでしょう。

音楽的音色は、耳にのみ訴えるとか、一瞬の逃避的快樂を与えるのみという理由でこれまで低い評価しか受けなかったかも知れませんが、いまや肉体的喜びと知的喜びとを結び付ける芸術と正しい評

価を受けるようになりました。その喜びは理性を弱めることなく感覚を充足させ、したがって、高潔な人々は墮落するどころか益々陶冶され、善良な人々は権利を奪われることもなく喜びに浸ることができます。……〈中略〉……喜びと無邪気さは決して切り離されるべきものではありません。しかし、われわれはそれらが合致することはめったにないと思っています。結びつけるのはただ音楽のみなのです。

音楽が女王陛下をお慰めするものと知っている人達に音楽の純粋性を説明したり、その莊重さを主張する必要はありません。願わくば女王陛下が音楽で心を楽しまれる時、それは邪惡からの逃避ではなく、善の流布として、心の煩いを避けるためではなく、別種の至福として享受されることを。それが、女王陛下、私の心からの願いなのです。しかし、だからと言って、私は崇拜の念や熱烈さの点で特に自慢はできません。というのも、女王陛下の美德は遍く知られているからに他なりません。大英帝国の臣民はたとえ他の問題で意見が分かれるとしても、女王陛下の美德を見る目は皆同じですし、祝う声も皆同じです。国民皆が声を合わせて賞賛する御名はどんなに称えようと称え過ぎることはありますまい。

女王陛下の最も忠実にして、
最も献身的な僕たる、
チャールズ・バーニー。

シャーロット王妃宛てのこの献辞はジョンソンによって1776年に書かれたことは確認されているが、そのアーギュメントはどのようなものであろうか。まず最初に王妃が庇護者になるなら、著者は学者達の批判を回避できること。また研究に消費された時間と労力が無駄とならないことを強調。一転して音楽の一般的価値と長所とを論じている。次に音楽が王妃の喜びとなることを希う言葉が続き、最後に王妃の有徳的美質を絶賛して終わる。その流れを要約すると次のようになる。パトロンの權威とその有効性——音楽の一般的価値と長所について——王妃への希望——再び王妃の有徳性を絶賛。

二つの献辞を比較した時、疑いようのない類似点は冒頭部分の「庇護

者の権威とその有効性」を強調したくだけである。有力な庇護者の名は著作物の飾りとなり、いたずらな批判を回避させるという論法はまったく同一といってよい。さらに類似点を指摘すれば、著作物ないし当該学問の一般的意義の強調があげられる。また、共通する点は、庇護者の有徳性や専門的能力の称賛である。これら論の展開の類似点に加えて、表現パターンをみると興味深い点が指摘できる。「……あえて……する必要はありますまい」、「……するのは余計なことでしょう」といった間接的或いは婉曲的な表現が両者に共通している。これらの表現によって阿諛追従をギリギリのところで避け、嫌みなく恭順の意を表わすこと、ボズウェルのいう「恭謙で風雅な調子」を出すことが狙いになっていると思われる。以上の論考が十分な「内的証拠」となりうるかどうかは別として、二つの献辞に共通する点をいくつかは指摘できるだろう。

さて最後にジョンソンが献辞及びパトロン制に対して示す独特のスタンスについて再度考えてみよう。われわれは既に献辞に対する彼の曖昧さに言及したが、献辞に関するさまざまな面を検討してみると、ジョンソンのそれが単にボズウェルのいう「精神の高邁さ」にのみ帰すのは無理のように思えるのである。十八世紀においては献辞そのものに歴史的、文化的、経済的さらには道徳的な意味さえも複雑に絡み合っていた事情を視野におき歴史的スパンのもとで理解すべきではなかろうか。アン女王時代の貴族と作家の蜜月時代が去り、三十年代におけるパトロン制が衰退期を迎えた時ジョンソンは文筆業に身を投じた。文筆業についていえばそれは一つの時代が去り、新しい時代がまだ定着せず不安定な、いわば過渡期の時代であった。剛毅なジョンソンでさえ、文筆業で身を立てるのを断念しようとしたことが少なくとも二度あった⁴³⁾。

そして1747年にチェスタフィールドに『英語辞典』の「趣意書」を書き送り、その拒絶にあう（というより無視される）。前にジョンソンのその行為は「金銭的援助を意図したと判断されても仕方ない」と述べたが、あるいはボズウェルが伝えるように、その時でさえ貴族からの金銭的支援よりも献辞の〈本来的な意味〉に沿って献辞を書いたのかもしれない。もしそうであれば、七年後に辞典が完成した時点でのチェスタフィールドの援助申込はジョンソンにとって二重の意味で許せない行為であったであろう。一つは世上語られているように時期を失した申出に対するジョンソンの反発。そしてもう一つの理由は、これまで言及されていない

が、チェスタフィールドの見識を信頼し、〈本来的な意味〉を込めた献辞を拒絶されたことへの強い怒り。献辞に対するジョンソンの曖昧で、時には矛盾ともとれる姿勢をみると、とりわけ第二の点は重要性をおびてくる。献辞の代筆という一見無責任とも思えるジョンソンの行為にも様々な意味が複雑にからんでいることがわかるのである。

注

- 1) H. S. Bennett, *English Books & Readers 1558 to 1603* (Cambridge; At the University Press, 1965), p. 41.
- 2) Henry B. Wheatley, *The Dedication of Books to Patron and Friend, A Chapter in Literary History* (London; Elliot Stock, Paternoster Row, 1887), p. v-vi.
- 3) Quoted in A. S. Collins, *The Authorship in the Days of Johnson* (London Robert Holden & Co. Ltd., 1927), p. 137.
- 4) Cheryl Turner, *Living By the Pen* (Routledge, 1992), p. 95.
- 5) Collins, p. 137.
- 6) Ibid., p. 141.
- 7) コリンズはその他サヴェジ, ゲイ, トムソンの例をあげている。See Collins, pp. 141-163.
- 8) *The Tatler*, ed. D. F. Bond (Oxford University Press, 1987), Vol. II. pp. 464-65.
- 9) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond (Oxford ; Clarendon Press, 1987), Vol. V. in Vols. V. p. 174.
- 10) Ibid., p. 177.
- 11) See Collins, pp. 118-122.
- 12) Ibid., p. 181.
- 13) Ibid., p. 182.
- 14) *The Complete Works of Henry Fielding, Esq.* (New York; Barnes & Noble, Inc. Rpt., 1967), Vol. IV in Vols. V. p. 232.
- 15) Ibid., p. 231.
- 16) Act 111, Scene I.
- 17) Quoted in Wheatley, p. 115. また, *Hogarth's Works*, eds. John Irelan & John Nichols, F. S. A. (Edinburgh, 1883), Third Series の口絵にホガース自筆のコピーが付されている。
- 18) Wheatley, p. 47.

- 19) Ibid., p. 176.
- 20) Samuel Johnson, *The Plan of A Dictionary of the English Language, 1747*, A Scholar Facsimile (The Scholar Press Wenston, 1970), p. 1.
- 21) J. ボズウェル, 『サミュエル ジョンソン伝』中野好之訳 (みすず書房 1981年) 第一巻130頁。
- 22) 同書, 第一巻184頁。
- 23) 同書, 第一巻371頁。
- 24) 同書, 第一巻371頁。
- 25) 同書, 第一巻371頁及び第二巻18頁。
- 26) 同書, 第一巻371頁。
- 27) 同書, 第一巻370-371頁。
- 28) 同書, 第一巻371頁。原文が確認できず, リストから省いてある。
- 29) その他, *Sir Joshua Reynolds, Discourses on Art*, ed. Robert P. Wark (Yale University, 1975), W. Jackson Bate, *Samuel Johnson* (Harcourt Brace Jovanovich, 1977)。(但し, Bate のものには献辞の本文はない)。
- 30) ボズウェル, 第一巻112頁。
- 31) *The Works of Samuel Johnson, LL. D.*, ed. Arthur Murphy (Luke Hansard & Sons, 1810), Vol. II in Vols. XII. p. 88.
- 32) ボズウェル, 第一巻112頁。
- 33) Wheatley, p. 143.
- 34) ボズウェル, 第一巻135頁。
- 35) Murphy, p. 95.
- 36) ボズウェル, 第一巻232頁。
- 37) Murphy, p. 98.
- 38) Ibid., p. 99.
- 39) ボズウェル, 第一巻232頁。
- 40) Murphy, p. 111.
- 41) Quoted in Wheatley, pp. 119-120.
- 42) Ibid., pp. 178-179.
- 43) 文筆業の苦役から逃れようと, ジョンソンは上京後も教師や弁護士の道を選ぼうとした。(ボズウェル, 第一巻89-90頁及び92頁参照)。